

お釈迦さまは、ネーランジャラー河のほとりの菩提樹のもとで「さとりを開くまでは決してこの座を立つまい」と決意して坐禅を組み、禅定ぜんじょうに入りました。そして、八日目についにおさとりを開きます。この日を曹洞宗では「道みちを成なす日じょうどう」、「成道の日」として、大本山永平寺や大本山總持寺をはじめとする修行道場などでは十二月八日の明け方にかけて夜を通した坐禅修行を行います。

さて、お釈迦さまがこの時何をさとしたのか？ということは經典によりさまざまに私たちは推測の域をでませんが、“すべてのものは原因と条件である「因縁いんねん」によって生しょうじている”という、「縁起えんぎ」についての気づきがあったとされています。

この「縁起」への気づきにより、お釈迦さまは「苦しみ」はある原因や条件が合わさることで生み出されるものであり、その原因・条件が滅めつすれば「苦しみ」が消えてゆくと深く理解しました。

その上で、私たちの苦しみとは何か？ その苦しみの原因・条件とはどのようなものか？ 苦しみの消えた状態はどのようなものか？ 苦しみの原因・条件を滅めつするためにはどのような道があるのかを考えて行き、真理を見出したのです。

そしてこれを実践することにより、生きること、老いること、病やまい、死の苦しみを乗り越える、つまり解脱げだつをし、自らの「さとり」を完成しました。

成道じょうどう、つまりおさとりを開かれたお釈迦さまは、再び坐禅を組み、禅定ぜんじょうに入り、おさとりの境地きょうちを味わいながら、お過ごしになられます。お釈迦さまは当初、このおさとりを他の人々に理解してもらうのは困難だと思っていたようですが、その間に二人の信者ができ、やがてこの真理を世の人々に説いて行こうと決心し、ペナレスの郊外サールナートに向かいます。

サールナートでは、成道の前に共に苦行を行っていた五人の修行者に再会します。初めはお釈迦さまを受け入れなかった五人ですが、お釈迦さまの教えにしたいに心こころ惹かれ、最初の弟子となります。

ここに、さとりを開いた「仏ほとけ」、その教えである「法ほう」、その教えを理解し行ぎょうじる者「僧そう」。つまり「仏法僧（ぶっぽうそう）」の三宝さんぼうが整ったのでした。

お釈迦さまのおさとりの内容は、その後、説法せっぽうを通じて人々に伝えられ、その導みちびきによって多くの人々が「苦しみ」から解放されてゆくののです。